

日本応用磁気学会から日本磁気学会への会名変更にあたって —新たな展開と発展に向けて—

Implication of Changing the Japanese Name of Our Society —Toward Reformation and Expansion of Our Development Activities—

逢坂哲彌 早稲田大学（日本磁気学会会長）

T. Osaka, Waseda University (President of the Magnetics Society of Japan)

日本応用磁気学会は、1977年4月、日本学術振興会・応用磁気第137委員会の発展的解散に伴い発足しています。日本における磁気学の研究は、明治時代以降世界的な発明が続き、日本が誇るべき成果が数多く輩出されてきました。この伝統の中で、理学と工学との研究連絡を円滑にするために1967年に学振第137委員会が生まれ、本会発足に至ったと聞いています。

本年5月の総会から、私が平成19年度会長を引き継ぎましたが、このときの総会で、日本応用磁気学会から日本磁気学会への会名変更が承認されました。ここで、本会設立時の経緯に照らし合わせますと、理と工の調和した学会発展が望まれております。会名変更に当たり、会長として新たな展開・発展に向けた政策を明確に打ち出してほしいとの編集委員会からの依頼ですので、以下に会名変更に当たっての考えを述べさせていただきます。

本会が設立されてちょうど30年になり、確かに、一つの区切りの時期に当たります。本会会長として事務所に入りしてみて、本会はまだ事務組織等が発展途上期の少数学会体制であることを痛感しました。本会設立当時は磁気記録産業発展期に当たり、本会もその勢いに乗り、初期の15年間で会員数が急激に増加しました。しかし、少数会員学会であった体制はそのまま手つかずの状態、会員の規模だけが大きくなってしまったように感じられます。

磁気記録産業分野は、ここ10年ほど成熟期にさしかかっているようで、その影響もあり、本会の状況も会員の増減から見ると停滞期というよりはむしろ縮小期にさしかかっているといえます。大学・公的機関等の会員数は固定していますが、産業界の会員数は急激に減少しております。産業界が成熟期にあり、磁気記録分野から撤退する企業が出てくる一方で、新規参入企業が少なくなり、そうした状況に伴う関連企業数の減少が総会員数にも反映しているようです。結果として、本会正会員数は2,000名ぎりぎりまで落ち込んでいる状況になっています。すなわち、大学等会員数は一定のままで、全体のパーセントに直すと、ここ10年で大学等会員数は26%であったものが34%になり、企業会員は69%から57%になっています。このような時期に当たり、本会の地盤固めとさらなる発展を願う意識が本会の会名変更として表れ、磁気記録分野の応用のみならず基礎一般を含めた根の張った学会形成を目指す必要があると感じています。また、ちょうど学会が公

益法人化に移行する時期を迎えるために定款変更が必要な時期にもなるので、併せての対応が必要になっていることも事実です。

私がかつて会長を務めた電気化学会でも同じような時期がありました。1996年の学会設立60周年のときに、電気化学協会から電気化学会への会名変更がなされ、大きな組織改革が行われました。当時の正会員数は、たしか2,800名台でしたが、現在では4,000名台の正会員数となり、会名変更による活性化と、エネルギー産業のバックアップによる盛り返しが証明されています。

理工系学会を大きく分類すると、二つのカテゴリーに分けられます。一つは、学会の目的にたいへん近い専門家により構成されている場合で、1,000名から5,000名程度という規模のケースが多いでしょう。もう一つは、種々の分野から人が集まってきて、その規模は往々にして5,000名以上となります。例えば、本会は前者であり、電子情報通信学会は後者になるでしょうか。仮に前者を第一種学会と定義しますと、この学会は専門が近い研究者、開発者が集まるので、どうしても専門的になる代わりに横のつながりの強い学会本来の目的を愛する仲間同士の会という要素が強くなります。ところが、本会の会長職をあずかってみて、この定義から考えてみても、本会を愛して“ひと肌脱ぎましょう”という集団が少ないように感じます。通常この第一種学会では、こうした集団が会の発展の大きな原動力となります。この集団が本会では見えにくいということは、今までの会員構成がどうしても産業よりであったという背景によるものと思われます。同様の体質が、私が以前会長を務めたエレクトロニクス実装学会でも言えて、やはり同じような学会組織の弱さを感じました。そこで、私の本会会長時代には、組織の強化も当然ながら、大学等会員、企業等会員にかかわらず本会に属したら、本会を愛してやまないというグループを育成し、“磁気”を中心にした有意義な学会になるような地盤を育てたいと思っています。また、磁気分野の応用から見ても、磁気記録が成熟産業的に集約化されており、発展パターンとしてのS字カーブの頂点の時期にあたります。次の新たな発展のために本会からのブレークスルーとなるキーテクノロジー発信を行える地盤を整えた学会になることを期待し、その成果がまた本会にフィードバックされ、本会のさらなる発展があることを期待しております。